アジア・アジアパラ競技大会に関する懇談会

第１回懇談会 議事録

１　日時

2022 年 11 月 21 日（月）　13 時 00 分から 14 時 50 分まで

２　場所

愛知県庁本庁舎 3 階　特別会議室

３　出席者

奥野信宏（座長）	鮎京正訓	髙橋義雄	谷尚樹
谷本歩実	藤田紀昭	來田享子	

（50 音順、敬称略）

４　議題

（１）アジア・アジアパラ競技大会に関する懇談会－新たな理念の構築に向けて－

（２）意見交換

５　議事録

（１）あいさつ

大村知事　皆さんこんにちは。愛知県知事の大村です。本日は、ご多忙の中、「アジア・アジアパラ競技大会に関する懇談会」の第１回懇談会にご出席をいただきありがとうございます。また、日ごろは、アジア競技大会及びアジアパラ競技大会の推進につきまして、格別のご理解とご協力を賜り、この場をお借りしまして厚くお礼申し上げます。

2016 年にアジア競技大会、そして今年 4 月にはアジアパラ競技大会がこの愛知・名古屋で開催されることが決定され、運営主体となる組織委員会のもと、着実に開催準備を進めているところであります。

私どものアジア・アジアパラ競技大会の他、2030 年の札幌オリンピック・パラリンピックはじめ、大きな国際スポーツ大会の開催がいくつか決定、あるいは招致活動が行われています。確か、2025 年には世界陸上が東京で開催され、デフリンピックもまた東京で開催されることが決定されていまして、引き続き、そのような大きな大会の準備が進められていることだと思います。

しかしながら、東京オリンピック・パラリンピック、いわゆる東京大会以降、こうした大きな国際スポーツ大会を取り巻く環境は大きく変化したと考えております。東京大会では、大会開催経費やスポンサーシップなどの課題が浮き彫りとなりまして、国民に不信感を与えた側面があった点も否めないように思われます。

また、コロナ禍での開催となりましたので、国民に大きな不安感を与えるとともに、無観客での開催、選手と市民の交流事業の中止など、様々な

計画の変更を余儀なくされました。そもそも選手村を作ってアスリートが交流するということですが、コロナの感染リスクを減らすためには一切禁止、むしろバブル方式で接触しないということが東京、そして、この間の北京冬季もありました。全く真逆になったということではないかと思います。大きな計画変更を余儀なくされたということでございます。

日本選手はじめアスリートの活躍により大会は大いに盛り上り、国民の間では大会を開催してよかったとの声が上がる一方、はたして掲げた理念は果たすことができたのかという疑問も生じたのも事実です。

東京大会を経た今、多大な公費負担を伴う大規模な国際スポーツ大会の開催意義そのものが問われてきていると考えております。

こうした状況を踏まえ、私どものアジア・アジアパラ競技大会について、今一度、新たな大会の理念を構築し、県民・市民から支持される大会の開催を目指す必要があると考えております。

そこで、このたび、スポーツをはじめ幅広い各分野の専門家にお集まりいただき、この懇談会を開催し、ご議論いただくこととしました。

奥野先生をはじめ、委員の皆様には、忌憚のないご意見・ご助言をいただくとともに、大会の成功に向け、引き続き格別のご理解とご支援を賜りますことをお願い申し上げます。

ありがとうございました。

河村市長　やるからには盛り上げないかんので、アイディアを出さないかん、それは良いと思いますけれども。パラ大会というのは、これは常識というか、一緒にやるのは当たり前になっていて、長い間議論になっている障害者という言葉をこの際変える必要があるというのが１つ。それからもう１つは、子どものバスケット競技人口がかなり多いと思われるので、世界の子どものバスケット大会をやったらどうかと。盛り上がるし、親も来る、というようなことを申し上げておきます。

以上でございます。

奥野座長　大変僭越ですが、本懇談会の取り回しをさせていただきます。

先ほど知事、市長よりお話がございましたけれども、愛知・名古屋のアジア大会、現在のこの状況を受けての後の大会でございます。

また、同じように人口減少高齢化も進んできております。そういったことを背景にした大会だ、ということがありまして、スポーツ関係者、スポーツ愛好家の皆さんだけではなく、一般の市民の方々もいろんな面で関心が高いというふうに思っております。皆さんの知恵でいろいろ議論できます。どうぞよろしくお願いいたします。

（２）委員自己紹介

鮎京委員　皆さんこんにちは。愛知県公立大学法人の理事長をしております鮎京と申します。私は、元々はずっと長いこと名古屋大学で法律学を教えてまいりました。そして、特にアジア諸国の法律あるいは政治の研究調査をしてまいりました。そういう意味では今回のアジア競技大会、アジアに関わる問題に、今回取り組むことができるということで、大変嬉しく思っております。どうぞよろしくお願いします。

髙橋委員　皆さんこんにちは。筑波大学の髙橋でございます。私は、名古屋大学に

10年ほど勤めておりまして。名古屋大学総合保健体育センターというところで勤めていましたが、その前に日本サッカー協会で 2002 年、ちょうど20年前のワールドカップの招致活動を、さらに組織委員会作りを経験させていただきました。その後、現在は筑波大学の方に移りましたけれども、スポーツイベント論ということで、特に国際スポーツイベントの価値その作り方というようなことを研究しております。何か私の知見を活かせればと思って参加させていただきました。

どうぞよろしくお願いします。

谷委員　谷尚樹と申します。私は1956年に愛知県稲沢市に生まれまして、高校は河村市長の後輩にあたります。その後は電通に入社しまして、トヨタ自動車さんの担当ですとか、2014年からは中部支社の支社長をやらせていただいて、直近は、昨年末まで電通総研というシンクタンクの所長をやっておりました。

今回、私の生まれ故郷である愛知県、それから育ててもらった名古屋市に何かお役に立てば、というようなことで参加させていただいたつもりでございます。どうぞよろしくお願いいたします。

谷本委員　皆さまこんにちは。名古屋市生まれ安城市育ちの谷本歩実です。私は柔道出身です。オリンピックには2度、またアジア大会にも2度出場しております。

今回、東京大会の時には4週間、選手村の方で選手のサポートをさせていただきました。現在、日本オリンピック委員会理事ということで、選手のサポートをしていますが、スポーツに対する風向きが大きく、本当に変わって、現場もまた同じように変わっております。こういった大会国際大会とアジア大会の違い、を少しお力になれたらな,というふうには思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

藤田委員　皆さんこんにちは。日本福祉大学の藤田と申します。よろしくお願いします。私は大学でパラスポーツの障害者スポーツ、普及振興に関する調査研究を進めております。また競技では、皆さんご存知でしょうか、ボッチャという競技の普及振興に努めてまいりました。

昨年の東京パラリンピックでは、愛知の選手、私ども教えた選手が銀メダル、そして8位入賞ということで、大変喜んでいたところです。今回はアジア・アジアパラ競技大会のコンセプト作りから私どもの力を使っていただけるということで、非常に光栄に思っております。

どうかよろしくお願いいたします。

來田委員　皆さんこんにちは。聞こえますでしょうか。会議の直後に大学の講義がありますので、オンラインで出席をさせていただきました。

私は中京大学のスポーツ科学部におりますけれども、主な研究分野がオリンピックに関する人権あるいはジェンダー平等の観点からの歴史的研究をしております。先の東京大会の組織委員会には、半年だけですけれども、このジェンダー平等の問題を強化するということもあって加わらせていただきました。私の研究や経験がお役に立つのであれば、ということで今回参加させていただいておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（３）議題

ア　アジア・アジアパラ競技大会に関する懇談会
　　－新たな理念の構築に向けて－　（事務局説明）

事務局より、第 20 回アジア競技大会及び第 5 回アジアパラ競技大会の概要、東京 2020 オリンピック・パラリンピックの成果と課題、懇談会開催の目的について、配布資料をもとに説明。

イ　意見交換

奥野座長　それでは、委員の皆様からご発言をいただきたいと思います。国際スポーツ大会を取り巻く状況、愛知・名古屋で開催されるアジア競技大会への思い、等々です。できるだけ幅広にご意見を賜ればと思います。それを集約して事務局の方で整理をしていただくという作業を進めてまいります。遠慮なく早く集めていただければというふうに思っております。

事務局の説明が予定より若干早く終わっているのかな。7,8 分は可能だと思います。7,8 分を目途にご発言をいただければと思います。それでは鮎京先生お願いします。

鮎京委員　幅広に、ということでございますので、いくつか思うところを述べてみたいと思います。まず 1 番目に申し上げたいのは、「新たな理念の構築に向けて」のところに関連しますが、この大会の実施にあたっては、ぜひ、大学及び大学生の参加という問題について、意を払っていただきたいというふうに思います。ご存知のように、愛知県には愛知学長懇話会というものがありまして、その会議でも既に若干のやり取りがあったことは私も会議に出ていて感じたのですが、ぜひ愛知県には 50 いくつかの大学がございまして、大学 1 つ 1 つに平等な機会を与えて、そして大学と学生のやる気を吸収していくような方策を取ることが大事だ、というように思います。この点についてはそれだけでございます。

7 ページにあった、期待される役割ということで、①から④までありますけども、2 点思うところがあって、1 つは「② ダイバーシティ&インクルージョンの推進」というのがずっと文章の中で出てくるわけだけれども、これはかみ砕いて言えば、同じ文章にあるように、多様性を尊重し合う共生社会の実現という内容としておそらく使われていると思うので、横文字でいくかどうかというのは、市民・県民の皆さんに知らせていく上では、これを考慮する必要があると思います。

それから、内容的にこれはどうしたかな、というふうに思う事柄でありますが、①にあります「新たな時代の国際協調の源流となること」という、この意味があまりよく分からなくて。なぜこの場合に「国際協調」という言葉が使われているのか、またそれを「源流」というのは、どういう含みで言われているのかという、このことについてぜひもう少し説明が必要ではないか、というふうに思っております。なぜそんなことを言うかというと、ご存知のように、先ほども説明者の方から言及があったように、今の時代というのは非常に難しい、価値の問題が引き裂かれていくような時代状況にあることは共通の認識としてあると思います。ずっと歴史を振り返ってみると、1989 年のいわゆる東欧諸国の社会主義体制が崩壊した後にアジア諸国は、それに対してどういう対応を持ったかというと、一言で言うならば、自分達の進む道はちょっと違うけれども、しかしながらゆくゆくはそ

ういう方向、つまり今私達が自由とか民主主義とか法の支配と言っているような方向へといずれは行かないといけないし、というような、ある意味そういう時代精神であったように思います。ところが、昨年のミャンマーにおけるクーデター、そして今年のウクライナ、ロシアの戦争というような事態を見ていると、そういう考え方とはずいぶん違う方向へとずっと雪崩を打っている。したがって、アジアといっても非常に多くの国が日本と同じような考え方ではなくて、それとは異なる、例えば中国もそうでありますけれども、そういう欧米的な価値観とは別の道がある、というような主張が前面に出てきているような感じがいたします。そういう中で、このアジア・アジアパラ競技大会が行われるということを私達は認識をした上で、したがって、先ほど言われたような共生社会というのをどう実現していくか、相互理解がどのように進められるのかという、そういった観点を持つことが私は大事だと思います。

とりあえずは、以上です。

奥野座長　ありがとうございました。事務局の方からのご発言はまた後で包括的にリプライしていただきたいというふうに思いますが、個別に質問があった場合には、またその時だけお願いすると思いますので、よろしくお願いします。

今の鮎京先生のご質問を今の段階でお答えするというのは、鮎京先生が満足できるようにお答えいただくことはかなり難しいのではないかと思いますが。今の段階で何かお答えできることがありましたら、事務局の方からお願いします。

事務局（アジア・アジアパラ競技大会推進課長）　今、鮎京委員のお話を聞きまして、今この時代だからこその難しさがやはりあるというのは、おっしゃるとおりで。今まさに先生がおっしゃられたようなウクライナ問題等々が実際に現実問題として起こっている中で、やはり、このアジア大会自体は、第 2 次世界大戦を受けて、後のアジアの復興と言いますか、そういったところが理念のベースにあるという中で、海外では、先生の言葉で言うならば、欧米的な考え方とちょっと違う視点というところがあるというのは実際そうですが。そういう中で、今一度、このアジア・アジアパラ競技大会を開催するということが、やはりその国際協調の新たな局面での 1 つの道標になってくるのかな、なってほしい、というところもありまして、そういう意味で新たな時代の国際協調の源流となってほしいという、多分に私どもの期待と言いますか、思いも込めた項目出しということで、ここに掲げさせていただいているところでございます。

奥野座長　ありがとうございました。事務局の項目出しということで、今からさらに共通の理解を深めていければというふうに思います。ありがとうございました。続いて髙橋委員お願いいたします。

髙橋委員　それでは、資料を少し考えて作ってまいりました。スポーツイベントマネジメントをしている視点から作りました資料なので、1 つの意見としていただければというふうに思っております。

まず、今話した中で、そこに入る前に、今回の東京 2020 の問題に関しましては、おそらく法的な仕組み作りを、今後政府も含めて、JOC 含めて作

るということが大事であろうと思いますし、先ほど、本日のニュースということで談合の話がありましたけれども、細かい内容までは私も把握はしておりませんが、基本的にスポーツ界は、例えばその競技の運営をする特殊な競技を運営することのできる制作プロダクションやマネジメント会社というのがほぼ固定的にあり、かつ施設側もこの施設を使えるのはどこの会社、A 社・B 社・C 社に限るというような限定をしています。

そのようなことから、一般的な市場メカニズムで言われるような自由競争でないということが歴史的にも構築されている世界です。単純にそれが談合だと、一般に市場経済的に言うとなるのかもしれませんけども、参入障壁がめちゃめちゃ高い業界構造が現状あるということを知った上で、逆に言うとそれをどう乗り越えるか、愛知県・名古屋市の大会ではどのように自由主義的な市場メカニズムを導入するか、という議論をした方がいいかなという意味で、スポーツ界にも問題があるということをまず話させていただきたいと思います。

それから、東京オリンピック・パラリンピック等は、これまで現在オリンピック開催中 7 年前に決定するということのルールが変わってしまいました。これまでは 7 年間の準備をして、様々な国際的なスポーツイベントの価値を実現するようなことをしてきましたが、今回の大会に関する 2026 年も 4 年しかなく、様々な準備をする活動がかなり時間的に限られているものではないかというふうに思います。それで、やはりそうなった大会をどうマネジメントするかというような視点で考えますと、例えば大会理念は、東京大会は 5 つコンセプトありましたけども、もうシンプルにシングルイシューで攻めるみたいな、これからの新しい大会のあり方だと思います。それからアジアですので、アジアの人々が共有できなければ駄目だということをベースに考えないといけません。さらに今回のアジア・アジアパラ競技大会を通じて、社会課題の解決に資するんだ、ということを言うことが非常に大事で、単に競技を 40 種目やりました、国際大会をいっぱい開きました、では駄目だというふうに思います。

それから大会関連の活動の際に常に立ち返れる大会理念。これは何のためにやっているのかとなった時に、立ち返られないといけないと思っています。さらに、大会終了後に愛知・名古屋で成果が評価できる、つまりやりっ放しでないことが必要かなと思っています。

そこで、これは今日私の提案という形のもので、ご議論いただければいいと思います。1 番上のコンセプトとして、「アジアの 子どもの 未来の ために」、これは何度も言い続けると、誰もがおそらく言えるメッセージになると思います。完全にシングルイシューです。この問題は、少子化問題、少子化も例えば韓国も中国もこれから来ますし、日本がおそらくリードしてアジアに示せる問題では利用できる立場じゃないかと思います。

それから、まだまだ子どもの貧困問題を抱えている国に対するサポートというのはアジアの大会で示すことができるのではないかな、と思います。いずれにせよ、子どもを産み育てたくなる、私も健幸（ウエルネス）としましたけど、社会制度環境を、アジア・アジア・アジアパラ競技大会を通じて作るのだ、というふうに言うと。実は大会のスポンサーさんも様々なコン

セプトでバラバラに自由に使ってくださいと言われるよりは、アジアの子どもの未来のために、というシングリッシュにどう自分達が関わるかということ、ストーリーが描きやすいです。もう 4 年間しかないので、ストーリーを描きやすくしてあげて、全ての活動はアジアの子どもの未来のために繋がっているよね、って必ず振り返るようなメッセージを 1 番上に置くと、環境問題全体の問題となると、全てアジアの子ども未来のためにこの関係をどうするか。全体をどうするのか、というふうにひっくるめられるじゃないかな、というふうに考えています。それから、大会も 4 年しかありません。継続的なプラットフォームになってあげて、様々な活動諸団体が、この言葉で一致団結しようというムーブメントを作らないと、もう間に合わないかな、と思っています。かつ、アジアで活躍する組織団体はかなりあります。アジア開発銀行さんもそうですし、そのような団体をどう取り組むかということをすると、嫌が上にも、日本政府も入らざるを得ない、という座組が作れるのではないかな、というふうに思っています。

地方発で国を動かすというのも新しい国際大会のあり方かな、と思っています。わずかな時間でありますけれども、考えてみました。ぜひこれをもっとたたいていただいて、こんなイメージでどうですか、という提案させていただければと思います。

最後に、スポンサーさん、いろいろな市民、民間組織も含めて、関わり合いたいという組織にとって、アジア・アジア・アジアパラ競技大会のメッセージが、自分達とのストーリーと合うようにするという作業はどうしても必要で、そういうような作業をする、先ほどプラットフォームと言いましたけれども、みんなが出会うような共通の会というのをかなり多くやっていった方が良いのではないか、と思うのです。それは、東京 2020 の失敗の裏返しで、あそこは何もしない短い間にどんどん物事が決まっていった。しかも理事の人も聞いてないうちに決まっていた、みたいな流れにしてはいけなくて、なるべく、もう 4 年ですから、できる限り人が集まった中で、意見を集約するというような運営ができれば良いかな、というふうに思います。おそらくそうすると、人を出してくれる組織があったりとか、協力を出してくれたりする団体もあると思いますので、県庁や市役所だけの出向者にしない大会になるのでは、というふうに思って作ってみました。

以上でございます。

奥野座長　ありがとうございました。それでは、続きまして谷委員よろしくお願いいたします。

谷委員　私からは 2 つ申し上げたいのですけども。1 つは、先ほど国際協調の源流という言葉についてのご指摘もありましたけれども、国際的な視野でアジア・アジアパラ競技大会をどういうふうに位置づけるか。それからもう 1 つは、髙橋先生の話と共通する部分がありますが、次の世代に何をプレゼントするか。そのことをお話させていただきたいと思います。

今年亡くなった博覧会プロデューサーの泉眞也さん、愛・地球博では総合プロデューサーを務められましたが、この方の著書に「核兵器と遊園地」という本がありまして、そこで泉さんが、オリンピックと万博というのは 19 世紀に作られて、20 世紀が受け継いできた大事なものと書かれていま

す。ちなみに核兵器と遊園地というのは、20 世紀から 21 世紀に持ち込まれたものという、そういう意味合いのタイトルです。ではなぜ万博あるいはオリンピックそれからパラリンピックが大事にされてきたか。これは 1 つの公共財といいますか、公共の財産、英語ではコモンズという言い方になるかもしれませんけど、そういう価値をたくさんの人が認識して認めてきて、そこにグッドウィル、善意、人々の「良いものである」という思いが集約される装置だったのだろうというふうに思います。そのことが時代を経て、だいぶ変わってきたところがあるのだろうと思います。それから、国際協調って言える時代なのか、という現状認識も私全く同感ですけども、だからこそ、改めて国際的に何か共通の価値を共有するような仕掛け、そういうものの一環として、アジア・アジアパラ競技大会を位置づけられると良いな、と考えております。今度のパリオリンピックのスローガンは「ゲームズ・ワイド・オープン」だそうです。それからアジア大会のメッセージは、「IMAGINE ONE ASIA ここで、ひとつに。」であるとうかがいました。より多くの人に開かれるという、そういうワイド・オープンということも大事ですし、IMAGINE ONE ASIA という言葉にもすごく意味があるだろう。One Asia、1 つのアジアというのは、実際にはとても到達できない問題を抱えています。だけど、みんながそういう想像力を働かせること、それはできるだろう。このイマジンという言葉は、考えれば考えるほど深い意味があるのかな、という気がしていまして、その辺に多くの人達のグッドウィルをどうやって集められるか、というヒントがあるんじゃないかと思います。

それからもう 1 つ、次世代という話ですが、これは多分に日本の問題だと思うのですけれども、電通総研ではクオリティ・オブ・ソサエティという社会の質、クオリティをテーマに掲げて毎年レポートを出してまいりまして、今年、2022 年のレポートのタイトルは、「次世代に、希望をつなごう。」といたしました。Web サイトで見ていただけます。クオリティ・オブ・ソサエティの中で、私が所長を務めていた間は、特に次の世代と地域、この 2 つに焦点を当ててやっていけたらいいな、ということを考えていました。何となれば、もうご存知のように少子高齢化というのがどんどん進行していて、2040 年に日本の高齢者数がピークになると。一方で、出生数の減少が加速していますので、高齢者の率が最大になるのは 2060 年ごろじゃないか。これから 20 年から 40 年近くの間、さらに少子高齢化と人口減少が進む。そうすると、日本の経済社会の中核を担う働き手のような人達、次世代の人達に背負わせる負担がすごく大きくなるであろうと。この人達にどう前向きに頑張っていただけるか。SDGs の言葉で「誰 1 人取り残さない」という言葉が今すごく普及していますが、私の認識では、1987 年の国連の委員会では、サステナビリティとは次の世代が今の世代と同じような豊かさや権利を享受できること、という定義があったということです。これは非常に難しいことです。そういう意味で言うと、日本においては、特に次世代の人達にバイアスをかけるぐらいにして、後押ししてあげないといけない。私は千葉市に住んでいますが、千葉市も東京オリパラの会場になっておりました。市内の小中学生が観戦する、試合を見に行く機会を

予定されていたのですが、苦渋の決断で直前に見送るということになって、試合を見るとか、あるいは国際交流の機会とか、そういうものが多分に失われてしまったという一件があります。それを今さら言ってもしょうがないのですが、逆に言うと、このアジア・アジアパラ競技大会というのは、愛知県・名古屋市をはじめとして、子ども達にとっては本当に得がたい経験になるはずなので、そういうことが実現できればいいと思いますし、それから髙橋先生がおっしゃったスローガンの「子ども」に焦点を合わせるということも方向性としては十分あるのかな、と思っています。

いずれにしても、次世代の人達ができるだけ多く参画する機会、場を作る、どうやって作るか、そういうことが大きなテーマになってほしいな、と思っております。

以上です。

奥野座長　ありがとうございました。

それでは続きまして谷本委員お願いいたします。

谷本委員　谷本です。私は、アスリートの目線から少しお話させていただきたいと思います。2 つほどありますが、まず 1 つ目。私は、8 年半、2020 組織委員会の理事として、組織に携わらせていただいたのですけれど、その時の反省と、実際に JOC の立場として共通するといったところのキーワードとして、やはりクリーンという言葉が一番しっかり落とし込まなきゃいけないという。クリーンという言葉が今、非常にスポーツ界にとっては必要なのかな、ということを感じております。やはり、2024 年パリ大会では、第三者機関の監査というところで、しっかりとそういったクリーンを証明していく、ということがもう出ています。一方、アスリートの方、オリンピックだ、アジア大会だ、というところで出場するにあたっては、自分自身の大会の実績、競技実績だけでなくて、例えばアンチ・ドーピングでクリーンを証明しないといけない、また、インテグリティ教育を義務付けるなど、しっかりとそういったクリーンというものをアスリート自身に根付かせている動きがあります。

そういうことで、1 つ目がクリーンということ。また 2 つ目は、アスリートの現役時代の視点を加えると、国際大会・アジア大会・オリンピックの違いは何ですか、と選手に問うと、やはりアジア大会というのは、1 つはロサンゼルスオリンピックの前の段階で出場権を獲得するための、ものすごく負けられない戦い、という位置づけでもあります。それともう 1 つ、やはりアジアというところで、文化交流というそういった素晴らしい交流、冒頭、大村知事の話にもありましたが、今回 2020 の東京大会の選手村ではそういった交流は禁止されたこともあって、選手達はなかなか交流できなかったです。おそらくこれは 2026 年には可能になると思いますので、こういったところへ力入れていけたらな、というふうに思います。やはり、2020 大会の時の成功例としまして、参画といったところで、都市鉱山のメダルであったり、マスコットの選定であったりといったところで、今でも子ども達が、これ私達が選んだんだよ、というふうに教えてくれます。こういったものがレガシーとして残っていくのだろうな、というふうに思っています。

また、アジア大会と国際大会との違いといったところでは、誰もが参加できるというところにすごく魅力がありまして、国際大会であると、観客としてしか参加することってできませんが、アジア大会になってくるとボランティアであったり、選手団のキャンプ地という形で受けることができたり、また、来た選手達と交流するということもできたりするので、こういったところの文化交流、非常に力を入れていけたらなというふうに思っております。

以上です。よろしくお願いします。

奥野座長　どうもありがとうございました。それでは、藤田委員よろしくお願いいたします。

藤田委員　私も資料を準備してまいりましたので、それを基にお話させていただきたいと思います。

学生達は結構オリンピックを見ていないです。あまりにもオリンピックというものがかけ離れた存在になってしまっているのではないかな、という。どうしてそうなっているのかというと、結局強い人、すごい人は自分達には関係ないし、それからテレビに出てお金儲けする凄い人だな、というふうな捉え方じゃないかな、というように思います。

そこを引き戻していくためにどういうことをしていかないといけないのか、ということで少し考えておりました。まずよく言われますスポーツの力と言いますが、スポーツは近代社会で非常に発展してきましたけれども、この近代社会自体が平等な競争を肯定して、そこで勝利した人はすごい、そこに価値を置いてきたということです。スポーツも同じく、同じような構造を持っていて、スポーツの受賞者は非常に価値が置かれ、あまりにも価値がそこに置かれすぎて、あの人達は自分達はとは違うというふうな感覚というか、そういうものがあるのではないか。そういった意味では、勝者を選別して、弱者を排除していくようなシステムをスポーツ自体が持っているということです。これに歯止めをかけることができるのが、最後まで力を出し切って勝利した相手を勝者と敗者の立場を超えて互いに支え合うスポーツパーソンシップ、そういう理念であるとか、志（こころざし）、心の持ち方というのは、トップレベルであろうが、レベルの低いこれからスポーツ始めたばっかりの子ども達であっても同じだと思います。そこをきちんと伝えていく必要があります。東京オリンピックでは高浜出身、スケートボードの岡本碧優選手、4位だったでしょうか、最後は難易度の高い技にチャレンジして失敗して。でも周りが、よくやって頑張ったね、というふうな考え方をしたということです。そういう困難に挑戦して力を出して、互いにリスペクトし合うということ、それが競争の前提になっている。そこを伝えていく。ただ強いだけじゃなくて、そういうことができて、それが激しく厳しい競争が、戦争とか喧嘩とは違う、とても人間的で文化的なものだ、ということの条件であることのように思っています。こういった部分が報道の仕方にも非常に問題あるかと思いますが、誰が凄かった、ということだけではなくて、こういった部分をしっかり伝える必要があるのかな、というふうに。これが1点目です。

そういった中で、東京オリパラでは、多様性と調和、ここではダイバー

シティ&インクルージョンということになっていますけども、これがビジョンの中に掲げられています。この多様性と調和とは、どんなことだろうというふうに考えたのですけども、私自身は何かを理由にそこにいる意味を問われない、誰もがそこにいられて、「何でお前がそこにいるの」「何しているの」「こういうことやって何か意味あんの」というふうなことを問われない社会だと思います。誰かを排除するような社会、あるいは何かの理由で自分とは違うというふうになってしまうような社会というのは、排除している側がいつ排除されるか分からないと思います。例えば、私達だってもしかすると何十年か先にAIが進歩して、みんなにいらないよ、というふうには言われてしまうかもしれないです。高齢者になったらいろいろな機能が落ちてくるし、そういう人達は税金の無駄遣いだ、みたいなことを言われないような、そこにいて当たり前なんだよ、という社会じゃないかな、という。そういう排除していく社会が進んでしまうと、ホロコーストであるとか、相模原の障害者施設の殺人であるとか、そういったところに結びついてしまうというふうに思っています。なので、煎じ詰めて言えば、誰もがそこにいて、その理由や意味を問われない社会多様性かな、と思っています。何か理由をつけて排除していくのではなくて、受け入れていく方向にベクトルをきちんと向けておく、ということが必要だと思います。ただ、何でもかんでもどんどん受け入れられるというような状態ではないと思います。難民を、全員希望する人を入れていくことはできないですし、高齢者の年金をどんどん上げていくこともできないし、そこにはせめぎ合いがあると思います。そのせめぎ合いを厭わずにディスカッションしていくところが、包摂世界に向けての過程だと思います。スポーツの世界と、ただトランスジェンダーで男性が女性になった人が女性としてオリンピックに出ることに対しては、ものすごくいろいろな意見があります。しかし、この間のオリンピックの重量挙げでは、ハバード選手というニュージーランド選手は、一応女性として参加できるわけです。それは、IOCがそういう包摂していくという方向に舵を切っているから出られるわけです。そういうふうな議論はいろいろありますが、その議論を問わずにやっていく過程ことこそがすごく大事じゃないかな、というふうに思います。アジア・アジアパラ競技大会もいろいろことが多分起こってくると思うのですが、そこをしっかりディスカッションしてやっていくと。そういう姿勢が必要だ、というふうに思います。

最後にアジア・アジアパラ競技大会への期待ということですが、現在は不寛容であるとか、対極化・対立による分断、戦争といったような言葉で形容できる社会、こういった困難に挑戦し、力を出し切り、勝敗と国を超えて互いにリスペクトし合う姿を示す非常に貴重な機会ではないかと。アジア・アジアパラ競技大会は、ともにそういった力を持っているというふうに思っております。先ほど河村市長もおっしゃっておりました、当たり前のようにアジア・アジアパラ競技大会をやると。その理由を問われない、ということだと思います。そのこと自体が非常に重要になると思います。何でアジア・アジアパラ競技大会をやるの、といった意見は、だいぶ少なくなってきていると思います。当たり前のようにそういうことが行われる

ということ自体が非常に重要です。さらに、多様な人々であるとかが存在して、そこに理由を問われることなく、例えば障害者スポーツであれば、クラス分けの制度など使って一緒に協議をしていくと。それが、そういった姿が共生社会のモデルとなっていくということだと私は思っています。そういった姿、そういったスポーツをぜひ東京オリンピック・パラリンピックでできなかったことを子ども達に直接見せる、そういう機会になると非常に良いと思います。

以上でございます。

奥野座長　どうもありがとうございました。それでは続きまして、來田委員お願いいたします。

來田委員　よろしくお願いします。資料を用意したのですけれども、私の方から共有をさせていただきたいと思います。見えておりますでしょうか。大丈夫でしょうか。

はい、よろしくお願いします。私の場合は、先ほどから何人かの先生も触れてくださった、D&I の推進の視点からの検討について、特にジェンダー平等に着目してお話をさせていただければ、と思います。東京大会では、このスライドに示しましたように参加選手、オリンピックの場合は 49%、パラの場合は 40.5%というように、女性の参加が増えたということ、あるいはオリンピックの種目が男女で同数になりましたとか、混合種目が 18 になりましたとか、そのような達成があったとされています。これは先ほど藤田委員がおっしゃったように、大会がこれからの未来を映し出して子ども達に感じてもらうための 1 つのモデルの場所としての機能を果たしているというように思います。

例えばジェンダー平等で言えば、両性が同じ割合で存在して共に参加して、何かを一緒にやっていくという、そうした社会のイメージを伝えていくという、そういう機能の 1 つを果たそうとしたのだ、と考えられるかと思っています。ただ、この東京大会の課題もありまして、これらの達成のほとんどが、実は IOC のリーダーシップに依るものであって、ジェンダー平等に関する組織委員会による主体的な取組というのは基本的にはほとんどみられず、組織委員会内部のジェンダー平等や多様性を増やすということに終始してしまった、限定的なものに留まってしまった、ということがあります。現在のアジア・アジアパラ競技大会の組織委員会のジェンダー平等ないし多様性がどのようになっているか、ということについては後ほどまたお伺いしたいと思いますけれども、こうした内部のことだけではなくて、実はオリパラのムーブメントの力に対する国際社会の期待に応えるための動向が必要だった、ということを指摘しておきたいと思います。これは組織委員会が公表したジェンダー平等報告書の 17 ページに、組織委員会として明記されています。課題を発見して戦略を立て、そして検証しながら進んでいくという、ムーブメントとしての側面が欠けていた、ということです。多様性といった時に、障害のある人々に対する理解の増進ということには、かなり力を入れていらっしゃった、もちろん十分ではないにしても、そこに焦点が当てられていましたが、多様性という言葉の中からジェンダー平等は抜け落ちている、そのような状況があったかに思われま

す。アジアということで見てみますと、日本生涯スポーツ学会というところで、アジア・アジアパラ競技大会推進課の杉山さんとも共有させていただきましたが、アジアにおける日本の状況をジェンダーギャップ指数で見ると、アジア大会に参加する国や地域 45 カ国のうち、世界経済フォーラムのデータに含まれているのは 36 の国や地域ですが、この中で日本は 23 番目です。ですから、世界経済フォーラムのデータに基づけば、愛知・名古屋がこの大会で受けている選手団の 7 割以上が日本よりジェンダー平等が進んでいる国や地域であって、そういう人達を私達は受け入れて大会を開催するのだ、という視点が必要だと考えることができます。現状では、日本が遅れているという認識は当然あるわけですけれども、アジアは世界の中で遅れており、その遅れているアジアの中で日本はさらに遅れているということを認識する必要があるということです。愛知県の場合、あるいは名古屋市の場合、経済分野と子育て支援の分野では、かなり取組をしていただいているかな、と分析しておりますけれども、性の多様性への理解促進についてはまだ十分ではない、他の県に比べても。先日、名古屋市でファミリーシップ制度を創設されましたけれども、この先なお、いくつか取り組んでいかなきゃいけないものがあるだろうと思います。とりわけスポーツ分野を横断するような取組は、愛知県のスポーツ政策に関する文書にも、これまでは示されてきませんでした。ですから、ここはやっていけるところではないかというふうに思っております。ちなみに、今 IOC がジェンダー平等政策でどのようなことを言っているかということにつきましては、資料を詳しく見ていただけるように、後ほど組織委員会から皆さんにも展開をしていただきたいのですが、参加をするということだけではなくて、リーダーシップというものをどのように育てていくかとか、あるいは安全なスポーツ、これは安全ということの中に、怪我をしないということだけではなくて、人権侵害をしないということが含まれているのですが、そうした問題。あるいはメディアとの関係、ポスターなど、いろいろなものに表象され、人々の目に映るスポーツの姿がどのようなものになっているかということ、あるいは資源の配分といったような辺りに注目がされて、戦略的な取組が行われている、ということをご紹介しておきたいと思います。それから OCA における最近の対応については、昨年の 9 月の理事会で男女平等の強化ということを強く打ち出しております。ジェンダー平等委員会というのが設置されているのですが、日本からこれに参加している山口香織さんにうかがったところ、今のところ、どちらかといえば女性スポーツ委員会、つまりスポーツにおける女性の活躍をどのように支えていくか、という議論が中心であると聞いております。一方で、この 10 月 30 日に OCA が主催するジェンダー平等セミナーが開催されております。そこでは 3 つのトピック、女性の代表性と参加を高めるということとか、あるいはジェンダー平等を具体的に推進していくためにどういう実践をするのか、ということが問われている、あるいはトップアスリートだけではなくて、草の根レベルにも働きかけなければいけない、というふうなことが戦略として提示されています。例えば 3 つについての詳しい項目については、ここに参考資料として出しておきましたので、今日は時間の関係から、後ほど

またご覧いただければと思います。

次にパリ大会に係わる動向ですが、2024 年のオリパラ大会に向けて、政策が出されております。フランスの場合は、大会の招致が決まった後に、1 年 2 年かけて、「大会を通してより良くするための 170 の指標」という名称の政策集を出しております。大会の準備期間中から、オリンピックやパラリンピックの理念に適合するように、170 の解決すべき社会課題の指標というのを定義した、という文書になっております。特徴的なのは、日本が最も苦手と言って良いかもしれないですけれども、省庁とか地方自治体でありますとか、あるいは地方自治体の中の部局、こういうところが横断的に取り組むという、そういう指標に仕上げているというところかと思います。これは大会を機にそういう苦手なものを克服するという意味でも参考になるものかな、と考えています。

それからもう 1 つ注目しておかなければいけないのは、オリンピックにおける開催都市契約が 2024 年に適用されるものから変更になっているということです。このコア要件として、これまで通りにオリンピック憲章のオリンピズムの根本原則を遵守すること、またオリンピック・ムーブメントの発展を促進し高める形で大会を行いましょう、ということが書かれているというのは大きな変更はないんですけれども、それに具体的な内容がついております。なぜ今ここでこれを紹介するかというと、アジア大会というのは、オリンピック・ムーブメントのアジアにおける展開であるからです。したがって、オリンピック・ムーブメントにおける基本方針というのを把握しておく必要がある、ということです。

具体的に、開催都市契約がどのように変更されたのか、ということを見ておきたいと思います。a は、オリンピズムの根本原則の文章そのままですのでここは割愛しますが、b に「人権を保護・尊重し、人権侵害があれば、開催国に適用される国際協定、法律および規制、ならびに開催国に適用されるビジネスと人権に関する国連指導原則を含む国際的に認知された全ての人権基準および原則と整合する方法で是正されるようにする。」ということが入っております。人権に関して国際基準に則っていきましょうね、ということが言われているということです。それからもう 1 つ、先ほどからいくつか発言が出ておりましたけれども、「開催都市で適用される国際協定、法律、規制および開催都市において適用される国際的に認められた腐敗防止基準に合致する方法で、不正または腐敗に関わるいかなる行為も行わないこと（効果的な通報（制度）とコンプライアンスの確立と意義に依ることを含む)。」というふうになっておりますので、東京大会のようなことはあってはならない、ということが強く謳われている、ということになります。

以上を踏まえ、検討すべきこととして、次のようなことを考えてみました。新たな事業モデルを検討するというのがこの懇談会の役割ですが、ここでの議論および方向性においては、スポーツイベントをやるのだ、ということではなくて、大会は社会課題解決のそのきっかけにするためのムーブメントなのだという、そういう視点で取り組む必要があるだろうということです。そういう意味ではワンイシューで、というふうに先ほど髙橋委

員が提案してくださいましたけれども、そうした視点、そういう呼びかけ型ストーリーの作り方というのは、私もとても大切ではないかと思います。

そして、その場合には、県のスポーツ政策との連続性も視野に入れることが必要かと思います。地域とか、学校教育現場とか、地元企業への働きかけというのを、東京大会はどうも大会盛り上げ教育や活動、イベント盛り上げ教育や活動に終わらせてしまったという感じがありまして、これはぜひ反省材料として活かした方が良いのではないかと思います。それからもう 1 つ、先ほど鮎京委員が最初に大学との連携のことをおっしゃいましたけれども、実は東京大会でも大学連携というのがありました。ところが、それがほとんど重要視されないで、社会ではボランティアを集めるための動員だ、というふうに言われたりもしていました。大学という場所ほど、異なる専門的な視点があり、異なる人々が集まる場所はないともいえますが、そういう場所の多様性を大学の枠を超えて融合させ、化学反応のようなものを起こして、新しいものを生み出していく、クリエイティブな場にしようという活動の実態がありました。しかし、そうした試みの部分というのは、東京大会ではメディアの方々にほとんど注目されず、また組織委の広報部署もこの大切さというのをほとんど注目していなかった。そういう側面があったように思います。しかし、組織的なつながりは残存しているので、それぜひ活用していけば良いのではないか、というふうに思います。

3 月 28 日にパラが追加された際の期待される役割の中には、ダイバーシティ&インクルージョンの視点として書かれた文章がありました。これが示されてはいますが、一体ダイバーシティ、多様性とは何なのか。その多様性の射程が不明瞭なまま、多様性とさえ言えば、その言葉が便利に使われ、そのまま通り過ぎて行ってしまうということが多々見られるように思います。そこをやはり射程をはっきりさせながら対応していくというふうな、そういう細かい視点が必要かな、と思っております。

ちょっと長くなったかもしれませんけれども、以上のようなことを考えております。ありがとうございます。

奥野座長　ありがとうございました。皆さん一通りご発言いただきました。皆さんの思い、期待あるいは対応として、非常に私も関心を持って聞かせていただきました。

若干時間がありそうなので、私からも 3 点ほど。今まで私のキャリアをベースにした時に、特に関心のある事柄として述べさせていただきたいです。第 1 点は、アジア大会がスポーツとしての感動・共感、そして地域都市づくりへの貢献ということであります。スポーツとしての感動・共感ですけれども、これは先ほど藤田先生から、学生はあまり東京オリンピック見てなかったという話がありましたけれども、私なんかは昭和 39 年の東京オリンピックの世代であります。あれを大学生の時に見て感激していたので。今回もテレビの前で、僕はそんなにテレビを見ませんが、一生懸命かじりついて見させていただいておりました。大会前後にはもちろんなこともありましたし、今いろんな課題も出ておりますけれども、それでも大会の評価自体にはあまり影響がないというふうに私は思っておりまして。大

会自体は非常に良い評価されているというふうに理解しておるところであります。

それから第 1 点のうちの、都市地域づくりへの貢献ということですが、競技参加される方々は生涯教育に望まれるわけでありまして、それが人の共感、あるいは感動を呼んでいくだろう、というふうに思いますが。私が外から見ていて、オリンピックが成功だったかどうかという評価は、都市地域づくりで下されていることが多いです。選手は一生懸命されていますが。ロンドンもモントリオールも、それからリオデジャネイロも、選手の活躍は当然ですが楽しいです。オリンピック自体が成功だったかどうだったかという評価は、地域づくり都市づくりのところで見てください、ということになります。国土計画では、この地域は、世界最強最先端のものづくり圏に位置づけられていました、今新しい計画の策定に入っておられますが、そこでもそういうふうな位置づけがされるかと思います。そういうことをベースに置いた地域、まちづくりへの貢献ということが大事ではないか、というふうに思います。

第 2 点は、交流・連携が新たな価値を生むということであります。私は長く国土政策地域政策、それからここの現場のまちづくりに関わってきました。私が関わるにあたって常に頭に置いてきたのが、交流・連携が新たな価値を生むということであります。今日の資料でも、あるいは皆さん方のお話の中でも、交流とか国際協調がいろいろな言葉で表されているというふうに思います。今の国土計画では、そういう交流連携のダイナミズムは、私どもは対流の促進という表現で表しておりまして、いろいろな施策をやっております。スーパー・メガリージョン構想などもそうであります。東京大会は、私どもは人の対流、世界的な人の対流を促す巨大な熱源ということで、この計画の中では主張したということがございます。

最初の挨拶で知事から、バブル方式で交流禁止になってしまったという話がございましたが、それは非常に残念なことだったというふうに、そういうふうに私は思っております。思っておりますけれども、今度のアジア大会では、もっといろいろな交流連携が出てくると良いな、というふうに思っております。選手だっただけじゃなくて地域と国との交流連携とか、

それからアジア大会で特に関心を持っている第 3 点、人の繋がりの構築ということであります。これは交流・連携にも関係してくるものでありますが、交流・連携には多様な形態がありまして、居住の地域内での人の交流、それから都市と都市、国と国を超えた人の繋がり、いろいろなものがあります。私は、個人的には、ここ 20 年ほど、人の繋がり再構築ということを政策の中心に置いて、いろいろな関心を持って取り組んできたところであります。具体的には、普通の市民が根拠になっている、という表現をしておりますけれども、国内では NPO の育成、その施策、そういうことに関心を持ってきました。オリンピックボランティアの皆さんの活動、そういうところも見ておりまして、こういった地域づくりへの多様な主体の参加が、安定感のある暮らし、あるいは質の高い暮らしを実現していくのだ、というふうに思っております。

スポーツと地域づくりについて、文部科学省は総合型地域スポーツクラ

ブ育成事業というふうに呼んでおりますけれども、その事業を積極的に推進していらっしゃいまして、地域のコミュニティに与える役割を見直すスポーツクラブを作る、それを地域住民が自主的に運営する、というふうな方向性を出しておられて、支援しております。これは私どもが NPO の育成等々に取り組んでいった方向性、今取り組んでいる方向性とまさに軌を一にするものであります。スポーツと地域づくり、これは多様な主体の参加ということでは、何か変わることがない普通の市民が公共になるということであるというふうに思っております。

これから整備されます文章がどうなるか、表にどういうワードが出てくるか、これは全く別の問題でありますが、私は人の繋がり、交流・連携、そういうことがキーの考え方の 1 つになっていくのではないか、というふうに思っております。

私からのご意見は以上であります。皆さん方の意見を聞かれて、あるいはさらに追加してこういう点を述べておきたい、というふうなことありましたら、どうぞご発言ください。

それでは、最初に來田先生。2 時半には授業にお出かけということですので、追加してご発言等々ございましたらぜひ。

來田委員　ありがとうございます。発言の機会を最後の順番でいただいておりましたので、ある程度先生方のお話、委員の皆さんのお話については、関係するところについては触れさせていただいたかと思います。少し追加をさせていただくとすれば、1 つは谷本委員からクリーンということがありましたけれども、このクリーンのためには透明性が必要であるということ、これをやはりきちっと踏まえる必要があるな、というふうに思っています。いろいろな法的な限界はあるのかもしれませんけれども、やはり第三者機関を置いて、きちっとモニタリングをしていくという体制をぜひアジア大会をモデルにして作る必要があるのではないか、というふうに私は考えています。それが 1 点となります。

それからもう 1 つは、メディアの方々への情報提供の仕方について、これは東京大会の理事として半年間関わった中で考え、感じたことですけれども、どうしても一方通行になりがちでした。一方通行で一生懸命情報を出したので、だから私達は透明性を確保している、というロジックというのは、市民目線ではなかったな、というふうに思っておりまして。市民がどう受け止めているか、どのような情報を求めているかということを理解して情報を提供する、情報の矢印の向きを両方向にすることを意識していく必要があるのではないかな、ということを感じておりましたので、2020 年大会の反省という意味でも、加えていっていただければと思います。

奥野座長　ありがとうございました。それでは、谷本委員どうぞ。

谷本委員　ありがとうございます。來田先生の方のお話もありましたけれども、東京でオリンピック・パラリンピックを開催しようよ、と言ったのが 2005 年です。招致に敗れて、もう一度挑戦するということで、東京都が予算をつけて、子ども達にいろいろと繋がりという部分で、交流という機会を与えてくださったのですけど、私これ 12 年間実際現場でずっとやってきました。何て言いますか、今のお話もありましたが、人の繋がり交流連携とい

ったところで、地道な草の根の運動、これがやはり着実になるんだな、ということをこの 12 年間で感じております。実際に、東京オリンピック後の取り組みを通じ、しっかりと子ども達に根付いていたな、ということを感じております。しっかりと地道な活動を着実なものにしていけたらと思っています。

奥野座長　ありがとうございました。大事なポイントだと思っております。ちょっと古い話になりますが、私は国土政策で人の繋がりの再構築と言いましたのは、高度成長期の田舎の方では人がいなくなってしまって、コミュニティが成立しなくなって、崩壊してしまいました。都市化として、どうかというと田舎から出てきた人が集まって、だけど大きな団地に住んで。元々田舎の濃密すぎる付き合いが嫌で出てきた人が多いものですから、なかなか都会での交流ができないというふうなことがありました。これではいけないかな、というふうな機運がありましたが、それが一気に表に出てきたのが阪神淡路の時でした。国土政策でもそうした人の繋がりの再構築ということは、少し古い話から入れてありますけれども、かなりベースであることだ、というふうに感じております。

ありがとうございました。それでは谷委員お願いします。

谷委員　來田先生に質問したいのですが、ご説明されたダイバーシティ&インクルージョンという言葉について、今、企業のそれに対応するセクションとしては、ダイバーシティ&インクルージョンに加えて、equity という言葉を入れて、DEI ということがあると思うのですけど、私の理解では、equity というのは公平とか場合によっては対等という意味があると思います。先ほど藤田先生からありましたけれども、スポーツだから勝者・敗者はいるが、どちらも対等である。どちらが重要でないということではない、そういうことかと思います。一方で、似たような言葉で、equality、平等という言葉もあります。こちらは単純に言うと誰にでも同じ機会が与えられるべきだ、というようなことだと思いますが、私はスポーツというのを、スポーツ界だけのものにしないためにも、できるだけ多くの人達が対等な立場で自分の役割、自分のできることで貢献しようという、対等という言葉が大事じゃないかなと思うのですけれども。そのあたりについてお伺いしたいのですが。

來田委員　ありがとうございます。今おっしゃっていただいたようにスポーツ界でも DEI 委員会というふうに、委員会の名称に E をつけるという組織もかなり出てきているかな、と思います。どちらの言葉を使うかということもケースバイケースかもしれませんが、参加の機会の平等を確保すればよい場合と、結果の機会を平等にしていくというふうな視点で取り組まなければいけない場合と、私は両方あるかな、というふうに思っています。スポーツの場合は、確かにおっしゃったように、勝敗というのがつくわけですけれども、この勝敗そのものも、大会の理念、ある意味綺麗ごとと言われてしまうかもしれない部分ですが、その場限りのものである、と考える必要があります。つまり、本来の、元々言われていたアマチュアリズムというのは、何の代償も求めない、何にも引き換えない価値として勝利をとらえています。例えば、勝利をしたからお金がいっぱい入るとか、そういう

ことは、本来の精神とは違う、というところからスタートしているということもありまして、その意味では、勝利をするということが何かの優劣関係に結びつくということがないように、スポーツはとりわけそうなりやすいので、だからこそ、そこを強調していかないといけないということかと思います。企業が取り組んでいらっしゃる D&I あるいは DEI の取組というのは、かなり先進的ですし、ダイバーシティによって、成果やその組織のパフォーマンスを上げていこうというふうな取組になっています。スポーツ界はなかなかまだそこを参考にすることができていないというところがあるので、組織もそうですし、もちろん今回の組織委員会もそうでして、大会に関わってくださる地域の組織も、企業などの先進的な事例を参考にしながらやっていけると良いのかなと思いました。とりわけスポーツは、勝敗ということによって優劣というふうに置き換えてしまいがちな世界なので、よりそのことが大切というふうに思います。

奥野座長　ありがとうございました。

他はいかがでしょうか。鮎京先生お願いします。

鮎京委員　奥野座長から 64 年の東京オリンピックの話がありましたが、私は実は東京オリンピックをテレビで全部見ました。中学校 2 年生の時に何で見ることができたかというと、病気になりまして。4 ヶ月名大病院に入院して、そのために病室で、ずっと朝から晩まで見て。9 時過ぎると看護師さんに叱られたりしていました。今日のお話で、1 つは髙橋委員のご提案、非常に感銘を受けました。誰もが言えるシンプルかつ具体的な大会、という言い方はとても大事であって、なるほど、という思いで聞かせていただきました。

1 つ議論すべき問題として重要なのは、來田委員の最後のページになりますけれども、D&I の射程が不明瞭であるという箇所があって、多様性という言葉の大事さ、というコメントがついておりますけれども、その射程が不明瞭だけではなくて、D&I そのものの内容が、私は限定的に使わないと非常に難しい問題へと発展していくというような気がしております。そこで問題は、多様性というのが、正の側面だけとして捉えるのかということが 1 つの論点となるように思います。多様性ということを言うと、多様であれば全ていいという訳でもないと、私なんかは思うわけで。それは例えば人権であるとか、今度、日本の外務大臣の主導で、国連で法の支配ということがテーマになるということが今朝の新聞に出ておりましたけれども、そういう概念 1 つ 1 つ取ってみても、多様に解釈しようとすればできるけれども、はたして多様であればそれで良いのか、という問題があるように思います。そうなってくると、さっき來田委員がご説明された開催都市契約の変更という、この議論も非常に私は大事だな、というふうに思いながら聞いていたわけですけれども、人権侵害の内容であるとか程度、態様を人々はどのように判断していくのかという、これも 1 つの論点として出てくるように思います。そうなってくると、多様性がすべて良いというわけではなくて、髙橋委員が言われたように、むしろ違いではなくて、アジアの人々が共有できる大会理念というような、みんながなるほど、というふうに思うような、そういう大会理念を前面に出していくことが大事です。

以上でございます。

奥野座長　ありがとうございました。他にございましたら、どうぞご発言ください。

藤田委員　追加です。このアジア・アジアパラ競技大会をどう運用するか、という視点が私は必要だと思っています。東京オリンピックのパンフレットではレガシーという言葉が非常に使われましたが、何を残そう、残すというのは要するにビジョンがあって、そこに向かっていく途中にオリンピックやパラリンピックがあって、そこに向かって、それからレガシーが残っていると思います。具体化したから残るのではなくて、そういった意味ではまちづくり専門の座長の前で言うのもあれですが、オリンピックを使ったまちづくりができているところ本当に少ないです。バルセロナオリンピックはうまくいったと言われていますが、それはバルセロナのまちづくりの中でオリンピックを利用して、そこを位置づけた、ということを聞いております。そういうことを愛知県・名古屋市が人権の問題にしてもそうだし、まちづくりもそうだし、国際交流の問題にしてもそうだし、将来どういうふうにやりたいのかというものがあって、だからアジア・アジアパラ競技大会をこういうふうなきっかけにして、こういうふうな方向性をつけてそっちに向かっていく、という発想を、その中でビジョンがモットーであるとか、そういうものが出てくるのではないかな、というふうに思っております。大会をやってそこでおしまいではなくて、まちづくりいろいろなものを、途中経過としての大会という位置づけが必要かな、というふうに思いました。

以上です。

奥野座長　ありがとうございました。他にご発言がございましたらどうぞ。

髙橋先生から提示の仕方を話が出てまいりましたが、簡潔に短く、事務局の皆さんも俳人になったつもりで一人一句出していただく、そういうことが大事ではないかと思っております。そのようなイメージについて、髙橋先生は何かご意見ございますか。

髙橋委員　僕のアイディアにご賛同いただいてありがたく思います。長い文章だとか、複数のコンセプトは、結局誰も覚えていないし、どうだったのかな、というふうになってしまいます。なので、もう最後の 4 年をぐっと締めるためには、俳句じゃないですが、ご参加いただいた皆が唱えられる、先ほど谷先生がおっしゃったアジア大会のメッセージ「IMAGINE ONE ASIA」と合わせて「Imagine the Future of Asian Children」のように、みんなが標語として使えるのではないかな、と思いました。

それ以外の話で。今回の大会組織委員会も既に出来上がっていて、來田先生は理事かな、理事の方も、どのようにやっていくのか、という議論、理事の方は言われたことをある程度運営する側として運営するのかもしれませんけども、ある程度我々の意見一致するような段取りを組んでいかないと、我々の議論が宙に浮いているのではないかな、というふうに思っています。かつ、先ほどの、例えば様々な運営の組織的な問題に関して言うと、やはり特別措置法がない今回の大会に関して言えば、みなし公務員規定はございませんし、ある意味、組織委員会のメンバーの認識に任された大会になっておりますので、問題となる利益相反ぐらい。いろいろな組織が出

てきた方が、本来は大会に向けるべき努力や資金を自分の会社に引っ張っていくというような利益相反に関して、常に第三者的な監査を入れるみたいな仕組みを作っていくしかないのかな。結局は1人1人の倫理感に依ってしまうわけですけれども。そうでない限りは全て公務員でやるのか、というのも、おそらく県庁と市役所職員だけでやれというのは難しいと思います。その辺り、理事の皆さんも、おそらくどのように先ほど言った谷本委員のクリーンを担保すべくシステム化するか、ということが非常に大事じゃないかなというふうに感じました。

以上になります。

奥野座長　ありがとうございました。他にございますか。

谷委員　ちょっと小さな話題かもしれませんけども、東京オリパラ、特にオリンピックについては、10代から20代半ばぐらいのテレビを見なくなったと言われる世代のテレビ視聴率が一時的に大きく上がりました。けれども、オリパラと違ってアジア・アジアパラ競技大会が仮にテレビで放送されたとしても、東京オリパラのような注目度を集めるかどうかというと、これはなかなかしんどいところがあると思います。ただ、先ほどからお話に出てきているように次世代とか子ども達の、ということで言うと、もちろんリアルな試合に触れるとか、それから愛知県・名古屋市を訪れる外国の選手達と交流するとか、そういうものが大事ですけど、それをさらに共有していくような仕組みがあってほしい。メディアの方々も試合を中継するということだけでなく、そういう観点での情報を出したり、拾ったり。そういうことが何かできないかなと思います。今は、SNSという手段がありますけれども、それは一過性のものでもあったりするので、その力は大事だとしても、やっぱり若い人達が、自分が得た感動とか共感とかそういったものをさらに共有して拡大していくという仕組みをどうやって作っていくか、ということも検討されると良いかな、と考えております。

以上です。

奥野座長　ありがとうございました。

私も、まずはアジア・アジアパラ競技大会にどう組み込んでいくかということを全く考えていないわけではないですが、これは国土政策の他に、大都市圏のまちづくり、それから中堅都市のまちづくり、そういうことについてずいぶん議論に関わってきまして。その時に言っていたことが、その大会の目的によって多少違いますけど、大きく5つ頭に置いていっておりました。1つは、国際的に活用されるまちをつくるということ。それから2番目はビジネスが効率的に行われるまちをつくるということ。それから3番目に高齢者に優しく子どもが生まれるまちをつくるということ。子どもが生まれる場所を作っていった時には出席していた女性の委員の方から後で、先生の表現はギリギリです、と言われましたが、今は大丈夫ということで。それから4番目に歴史文化が感じられ、環境に配慮したまち。それから5番目に自然災害に対して安全安心なまち。この5つぐらいをいつも頭に置きながら、対象となる議論の性格に応じて、こういう表現を使い分けながらやってきたということがあります。もしご参考になればと思ってお話しておきます。

何かございましたらどうぞ。

髙橋委員　谷委員の何かうまくやれないか、という仕組みの中で、今回の東京オリパラでは実現できなかったのですけれども、2000 年のシドニーオリンピック以降、各国がハウスと呼ばれる万博でいうパビリオンみたいなものを開催地に用意する流れが来ております。東京オリパラもコロナでなければ、私どももスイス大使館と組みながら渋谷ファイヤー通りにスイスハウスを作る用意をしていたのですが、結局できませんでした。

そういうような、例えば愛知では万国博覧会に経験があるわけですから、万国博覧会のように、もしくは常設パビリオンでなはなかったとしても、国際会議会のようなものをこの 4 年間、あるコンセプトに対して継続的にするということはどうでしょうか。街の人がタイパビリオンに行ってみる、インドネシアハウスに行っているみたいに身近になるとよいと思います。お金がかかるものですから、なるべく安く整理するような形で各国との交流拠点を目の前に見える形で示していくというようなことが良いですし、おそらくそうすると子ども達の、練習試合に来た子達はそこに寄っていくとかなるかもしれません。広島のアジア大会で 1 校 1 国運動みたいなことを始めましたけれども、そういうような活動をすると、あるメッセージのもと活動に振り分けていく、というようなことが具体的な策としてはあるのではないかな、と思います。

奥野座長　ありがとうございました。他にございましたら。

それでは、今までの議論を事務局の方からリプライといいますか、1 つ 1 つのご発言にお答え、今の段階でお答えいただく必要はございませんけれども、事務局の方で話総括していただければと思いますが。

事務局
（アジア・アジアパラ競技大会推進課長）　ありがとうございます。まず、この大会理念を、誰もが分かりやすい表現でというところで、方向性としては、今日髙橋委員会からもご提案がありました。本日の議論を踏まえて事務局の方でもいろいろ整理させていただきたいと思います。あと、それぞれ捉え方として、いろいろ課題がある中で、例えば共通的な部分で印象的だったのは、人の交流といいますか、そういう視点というところは、忘れてはいけない視点というところが委員の方のご発言にあったように感じました。それは、東京 2020 大会が無観客のため、非常に残念な評価をされる一方で、交流支援というところが、どうしても限られた大会だったというところの残念な面もあってのことかなと。大会をどういうふうに、人の繋がりというところでまたこの大会を位置づけていくのか、という視点だとか、その大会を一過性ではなくて、その先を見据えた中でその大会をどう位置づけるのか、という視点、また、スポーツを勝利と解釈するというような視点ではなくて、平等的な視点というところも今一度目を向ける必要があるのではないか、といったような視点。

今日いただきました視点というのは、私どもとしましても非常に参考にさせていただく非常に貴重なご意見だったと思っておりますので、また、本日の意見を踏まえまして、また次回以降、さらに議論を深めていって、どういう形で、この新しい理念構築に向けて検討を進めていくのか、またいろいろご相談させていただきたいと思っております。

事務局
（スポーツ局長）

愛知県スポーツ局長成瀬でございます。私からも一言、お話させていただきます。実は私、2016 年の招致が決まった段階からずっと担当しておりまして、開催構想を掲げたような理念とかを私どもが作ってきました。そのところ、本来皆さんのような有識者・学識者のご意見を聞きながら作っていくべきところ、JOC が立候補地を募集するということが急に決まりまして、時間がない中、作ってまいりました。今回こういう機会を私ども設けまして、大変刺激のあるご意見をいただきました。私の方も今一度立ち止まって考えてみたいと思っております。特に我々が悩むところは、東京大会が終わっても、新たな事業モデルの確立ということがありますが、元々、アジア・アジアパラ競技大会自体の認知度が低いということもありますし、大会自体の知名度も低いという点もあります。いろいろな形で盛り上げていかなきゃいけないと思いつつも、なかなかアイディアもなくて悩んでいたところであります。今日も本当にいろんな話を伺わせていただきましてありがとうございます。また今後、次回の開催は未定ではございますが、今日いただいた意見を消化する、咀嚼する、考えてみる時間も必要でございますので、もう少しお時間いただいて、第 2 回の会議を開きたいと思っています。その時に私どもの考えもお示ししながら、ご議論いただけると思います。

今日はどうもありがとうございました。

奥野座長

ありがとうございました。それでは議事は以上で終了させていただきます。ありがとうございました。事務局お願いします。

（４）その他

事務局
（担当課長）

どうも皆さんどうもありがとうございました。先ほど局長からもお話があったとおり、会議は年に２回ほど開催して、その後にまた意見集約など、提言を取りまとめていきたいというふうに思っております。次回の開催につきましては、改めて日程の調整させていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは本日は、長時間にわたり大変ありがとうございました。委員の皆様方からいただきました貴重なご意見を踏まえまして、今後も検討を進めてまいります。次回の懇談会につきましても、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、以上でアジア・アジアパラ競技大会に関する懇談会の第 1 回懇談会を終了いたします。

どうもありがとうございました。

以　上